

2026年6月18日

大里の人々の沖縄戦について調べましょう

—「平和の礎」名簿から沖縄本島で亡くなった人々の特徴をさぐろう—

みなさん、はじめまして。琉球大学で教員をしています山口剛史（やまぐちたけし）と申します。今日は、みなさんと大里南小校区の沖縄戦について一緒に調べましょう。実は大里の沖縄戦はよくわからないことが多いのです。みなさんに、平和の礎の名簿から、「大里の沖縄戦の謎」を一緒に探っていきたいと思います。

【調べる前に大里の沖縄戦を考えるための5問クイズ】

第 1 問: アメリカ軍はどこから大里に攻めてきた?

- ① 南（玉城、具志頭方面）から
- ②北（南風原、与那原方面）から
- ③西（豊見城方面）から

第2問：旧大里村の地域には、いつごろアメリカ軍が来た？

- ① 4月上旬 ② 5月上旬
③ 5月下旬 ④ 6月上旬

第3問：大里出身者で、日本兵として戦った人はいる？

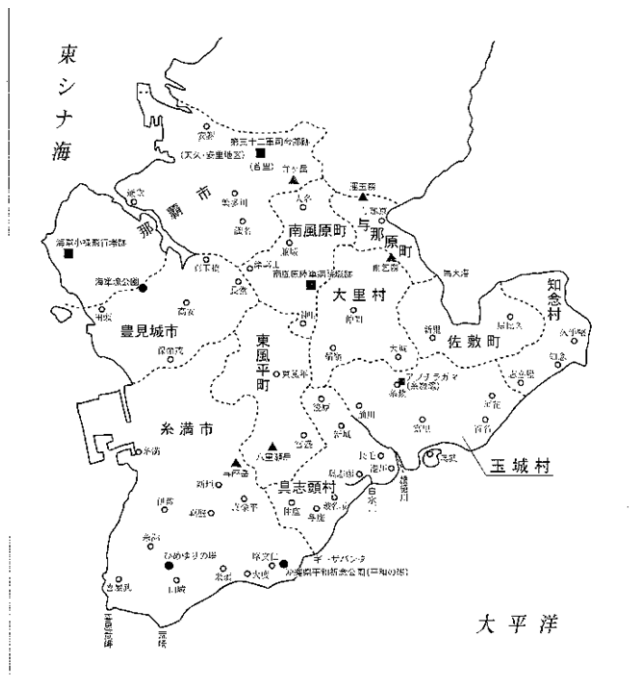
- ① いる ② いない

第4問:大里の人々は沖縄戦の時どこにいたのだらう?

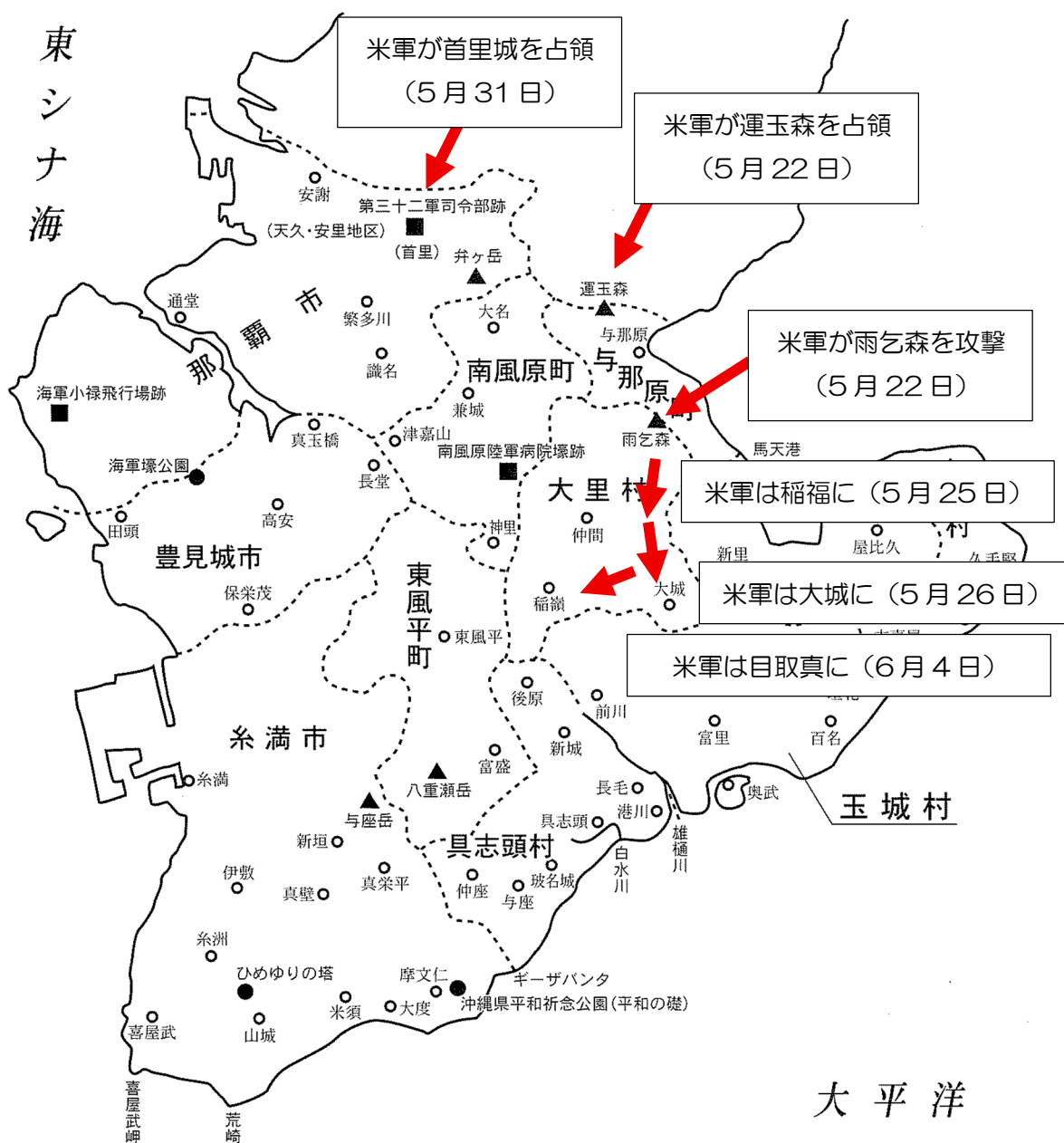
- ① どこか村外に逃げた ② 集落にいた ③ その他（ ）

第5問：平和の礎には南城市の出身者の名前は、8,302人刻まれています。大里出身の人は何人いるだろう。

- ① 2,464人 ② 1,276人 ③ 1,681人 ④ 2,881人



参考にしてみよう：米軍の進んでいた時期と場所



大里南小学校裏の高地は、アメリカ軍からは、Helen Hillと呼ばれていました。

アメリカ軍の記録には、6月1日の午前中、ヘレン高地の北東斜面から機関銃と迫撃砲の攻撃も受けた。高平地域に150M砲が15発落ちた。日中の敵の砲撃は軽かったと記されています。この資料には、6月1日～2日には大城（米軍名は181高地）でも軽い日本軍の攻撃があったとしています。6月3日には、玉城村の糸数まで進んでいます。

大里村の戦闘（知念半島の戦闘）は、5月中には終了し、知念半島が収容所になっていったとされています。

大里村の方の証言を読んでみよう

新垣良雄さん（昭和 11 年生まれ）

集落の壕に避難

「もう家にいることはできない」と、私たち家族は壕に避難した。稲嶺には集落の東側に四つの壕があった。一番上は兵隊が掘った壕で、屋号東大屋、前与那嶺、前大前小の壕は一つに繋がっていた。アメリカ兵が攻めてきたら逃げることができるように、兵隊の壕と民間の壕は中で全部一つになっていた。壕の中は人が立って通ることのできる高さで、幅は二人が並んで歩けるほどのものだった。奥行きは 7、8 メートルほどあつた。

昼は出歩けないので、夜に畑へ芋掘りに行った。家が焼かれる前、私の母は畑に行くつもりだったのか門のところに立っていて、私は家の床の間にいたが、道向かいに爆弾が落ちて母は土をかぶり、私のところには破片が飛んできた。幸い母は弾に当たらず、私も無事だった。破片は落ちた直後は紫色をしていて、水をかけたら煙が出た。

艦砲射撃^{かんほうしゃげき}の前にはトンボ（アメリカ軍の小型偵察機^{ていさつき せくしょう}の俗称）が飛んできて、その後から艦砲射撃^{かんほうしゃげき}を受けた。ヒューと音がしたら弾は近くには落ちず、音が止まったら近くに落ちた。音で分かったので、音が止まるとどこに落ちるかとても心配だった。壕にいる時も、艦砲射撃^{かんほうしゃげき}の弾が落ちるとコンコンコンと音がした。

「死ぬときは自分のシマで」

壕では、「死ぬときは自分のシマ（地域・集落）で死んだ方が良い、シマからは出るな」と言われていた。

毎日カンボウが落とされていた。前新屋小の壕にいた時、壕の前は壕から出された土と松の木などが積まれ高く盛り上がっていたが、その近くでヨシコさんが茶碗道具を洗っていたところ、彼女は爆弾が落ちるのが分かったのか、壕に逃げ込んだので皆が布団を被せていた。近くに爆弾が落ち、盛り上がったところは全部吹き飛び、壕の入口も埋まってしまった。

愛地^{きじゅうそうしゃ}で機銃掃射を受ける

小満芒種^{スーマンボースー}の時期だったから、上から水が流れ落ちてきて壕に溜まった。私は昼夜水を汲み出したがどんどん溜まっていったのでもうそこにいることはできないと、母と次姉（シゲ）と三人で玉城村（現南城市）の愛地に行った。目取真から愛知にさしかかるところで山から日本兵が 2 人降りてきたので、兵隊と一緒にだと彼らがアメリカ兵をやっつけてくれると考え、彼らと一緒に歩いた。

愛地に入って、現在八階建てのアパートが建っているところ（愛知バス停の近く）は当時は畑だったが、そこには野菜のフダンソウが植えられていて、花も咲いて人の高さまで伸びていた。その辺りでアメリカ軍の飛行機から機銃掃射を受けた。畑の前には茅が生えていたが、そこにプス、プスと弾が撃ち込まれる音が聞こえた。私は子どもだったからフダンソウの畑の中で土いじりをして遊んでいたが、母はあわてて屋号タマイの家に逃げて、姉は水が流れているところを這って逃げていた。二人の兵隊の姿は見えなくなっており、彼らがいなくなっからは撃たれなかった。アメリカ軍は茅の生えているモー（野原）を攻撃していたが、逃げる場所は無かったので、二人はそこに隠れていたかもしれない。彼らがやられたのかはわからなかった。

私たちはそこから愛地の屋号仲花城（長姉の嫁ぎ先）のおじさん家族がいる壕に逃げ込んだ。あとから玉城村船越の屋号富才小のおじさん達も来た。稲福の前太の家族も一緒だったと思う。その壕も狭くなったので、2、3日いた後、私たちはそこを出て仲花城の後ろの茅葺のアザマグワーに移った。次姉が台所でお湯を沸かすために立っていた時、アメリカ兵が鉄砲を向けて立っていたが撃つことはしなかった。民間人だから撃たなかったのだと思う。もうここにもいられないと、また壕に入った。

愛地の壕で捕虜になる

井戸の上に壕があったが、この壕は逃げるように通り抜けができていた。真ん中が下がって両方の入口が上がっており、上がっている場所に2日ほどいたが、そこで捕虜になった。

腰に手榴弾を下げたアメリカ兵が鉄砲を持って壕に来た。母と次姉が出てアメリカ兵のそばに立ち、母がスペイン語で「許してください」と言うと、アメリカ兵はわかったのか首を振ってうなずいていた。私たち家族はブラジル帰りだったので、母はスペイン語を話すことができた（私は家族が沖縄に帰ってきてから生まれた）。私が壕から這って出てアメリカ兵のそばまで行くと、アメリカ兵が私の頭をなでた。私はその手を払いのけ、絶対に触らせなかった。長姉（トミ、カミーと呼ばれていた）たち仲花城の家族は、私たち3人が捕虜になって歩いていく時に壕から出て立って見ていた。のちに知念で再会した。

（南城市の沖縄戦 証言編 大里 pp20—26 より）